

【一般演題4】 第15席 『経穴彙解』と『経穴纂要』の引書等にみる近世経穴書の構成

愛知 楠本 高紀

『経穴彙解』は水戸藩侍医・原南陽が享保三年（1803）に選述した経穴書で、同系書としては江戸時代後期における最も重要なものである。本書の特徴としては、当時最も通行していた『十四經発揮』の経穴分類に従わず、現在最古の鍼灸専門書である『鍼灸甲乙經』の経穴分類と部位記述を中心に構成されている点を挙げることができる。

『経穴纂要』は龜山藩侍医・小坂元祐が著した経穴書である。本書の特徴としては、基礎を滑泊仁の『十四經発揮』において構成し、引用は『鍼灸甲乙經』『医学原始』を主としたこと、また「内景」の解説において自らの解剖的知見をふまえた図譜を挿入している点を挙げることができる。

今回は、近世経穴書の構成研究の一環として、江戸後期のほぼ同時期に著述刊行された代表的経穴書であり、今日の経穴学にも少なからざる影響を与えた両書の引書等についての検討を行う。